予測の主観性と客観性

清水建設㈱
専務取締役　近藤　一彦

以前，日本経済の成長率をめぐって，2人の著名なエコノミストが毎年のように強気な予測と弱気な予測をおこない，論戦になったことがあった．

経済成長率のような数字による予測値は，時の経過とともに必ず実績値により当否が実証されるが，このときは概ね強気説の方が当たっていたように記憶している．

しかし，多くのデータをもとに客観的におこなった予測値が，人により大きく食い違うのは何故だろうか．当時，強気説側の関係者に聞いてみたところ，「強気の予測向きのデータだけ集めてこい」と命令されているとのことであった．何のことはない，最初から主観的に高い予測値を出すことを決め，この結論に都合のよいデータにより客観的らしい予測をしていたわけである．

一般的に，未来の事象を予測する方法としては客観的事実をもとに論理を積み重ね，合理的に結論に至る，いわゆる科学的方法が正しいとされているように思う．少なくとも，この方が，勘だけに頼った予測よりは多くの人の支持を得られていると言えるだろう．天気予報のような自然現象の予測では，科学的予測手法の進歩により，予測精度が飛躍的に向上していることは間違いない．

しかし，経済のような社会現象の予測の場合，対象となる現象が複雑で，かつ，観測者である人間そのものが観測対象の一部を構成しているため客観的予測が難しいことになる．同じような客観的データにもとづいて予測しても，人により見方が大きく食い違うということが起こりうるわけである．

このように，経済の予測には主観的要素が多いということになると，最近の日米の経済動向とその見通しについていわれていることについても，いくつかの疑問がわいてくる．

バブル崩壊後，日本経済は低迷を続けている．政府は緩やかな回復基調にあると発表しているがわれわれの実感はこの公式見解よりもはるかに悪い．

これにひきかえ，米国では好況が続いており，ニューヨークの株価も長期間にわたって上昇基調を続けている．この米国の好景気は，米国経済の構造変化に支えられたものであるから，21世紀まで続くという見方が米国における多数意見になっており，日本でもこれを支持する人が多いようだ．いわゆる，ニューエコノミー論といわれる考え方である．

ニューエコノミー論によると，情報技術の革新や生産のグローバル化，雇用形態の多様化などにより米国経済はインフレなき経済成長を実現しているのだという．

確かに，マイクロソフトやインテルなどの情報関連企業の業績はすばらしい．この情報通信産業を中心にして米国経済が長期の上昇を続けており，しかも物価が比較的安定していることも事実である．高値更新を続けている株価はこのような米国経済のパフォーマンスを反映したものであり，その原因は変動性のものではなく，構造変化による

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

ものである．このような構造変化をもたらしたものは規制を排除し，市場原理による自由競争を基本とするアングロサクソン型の資本主義原理である．だから，我々も早く日本型の経営を捨てて米国型の市場競争第一主義にきりかえなければならないという意見が日本でも多数意見となっている．

しかし，バブル期の日本でも日本経済の構造的優位性が語られ，日本的経営の良さが日本経済のパフォーマンスの原因として主張されていたことを忘れてはならない．不動産価格の高騰は情報通信技術の発展や東京の国際金融センター化で説明されていた．しかし，これらは結局バブルであった．

だから，ニューエコノミー論で説明されている米国の株高もバブルではないのかという疑問がもたれる．不動産価格の上昇など，それを裏付けるような兆候もみられるという．

ミシェル・アルベールは「資本主義対資本主義」という本の中でアングロサクソン型の資本主義とライン型の資本主義とを対比し，双方の長所，短所を比較検討した上で，どちらかというとライン型を支持する見解をしめしている．

しかし，経済パフォーマンスの現状をみる限り，ドイツや日本より米国の方が良いことは明らかである．この実績の良さがニューエコノミー論を生み，アングロサクソン型の資本主義を世界のデファクト・スタンダードとみる考え方のもとになっているといえるだろう．

しかし，たかだか5年や10年の実績だけでこのような判断をしていいかどうか．米国の好景気も結局バブルだったということにならないかどうか．ニューエコノミー論も株価のさらなる上昇を願う人々の主観的予測なのではないかということが疑われる．

ツキュディデスは「歴史」の中で「わたしのこの著書には物語めいたことがないとすると，この朗読を聞いても，多分たのしめるところは少ないと感じられるであろう．しかしながら，今ここで起こったことの確実なところは何であったかを見ようとする人が将来出てくるとして，そのような場合にも，またこのようなことや，これに近いことは，それが人間の自然の性質にもとづくならば，将来もまたいつか再度起こるだろうから，そのような場合にも確実のところを見たいと思う人たちが，この書物を有益だと判定してくれるなら，それで充分だろう*」ということを記し，このような人間の自然の性質として利欲心，功名心，恐怖心をあげている．

不幸にもツキュディデスの予言は当たり，歴史の中の記述と同じようなことが今でも世界のあちこちで起きている．

ツキュディデスの時代から現在まで2000年を超える時間が経っている．この間，科学と技術は目を見張る進歩をとげている．しかし，人間の性情はあまり進歩していないといってもよいだろう．

ツキュディデスは不幸な戦争の原因となった人間の自然の性質として，利欲心，功名心，恐怖心をあげたが，これは今も変わらずに，戦争をもたらし，バブルを引き起こしているといえるだろう．

科学と技術にもとづく天気予報の精度はますます正確になっていくとしても，人間の主観的要素が強い経済予測は，人間の自然の性質が変わらないかぎり難しいということになるだろう．

バブルを予測できればバブルは発生しない．だから，米国の現在の好況もバブルでないという確証はないわけで，目先の好不況だけをみて，日本的経営は駄目で米国式がよいなどと簡単に結論を出すことはできないのではなかろうか．

日本的経営優位論が束の間に消え去ったのと同じように．

---

* 田中美知太郎「ツキュディデスの場合」より引用

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．